

# こまじのう

## 掲示板



発行所 (社福) 千葉県身体障害者福祉事業団  
千葉県千葉リハビリテーションセンター  
発行責任者 高次脳機能障害支援センター  
センター長 太田 令子  
〒266-0005 千葉市緑区誉田町 1-45-2  
043-291-1831 (代) 内 198



# 22

発行日 2014年3月28日

## 菜の花 メッセージ

千葉県千葉リハビリテーションセンター  
高次脳機能障害支援センター  
センター長 太田 令子

先日開催された「平成 25 年度高次脳機能障害及びその関連障害に対する支援普及事業 第 2 回高次脳機能障害支援普及事業全国連絡協議会」で、高次脳機能障害支援拠点機関は全国 100 箇所に設置されたと報告がありました。おもえば、千葉県では平成 13 年度 4 月に堂本知事就任によって高次脳機能障害支援モデル事業に参画することが決まってから 13 年間取り組んできたこととなります。当時支援拠点病院として千葉県千葉リハビリテーションセンターが指定された時は、高次脳機能障害支援に関しては右も左も分からないヨチヨチ歩きだった我々も、多くの先進的な取り組みをしてこられた機関の皆さんに導かれ、今では自力で歩ける力がついてきました。「10 年以上かけて歩けるようになっただけ？」そんなお叱りの声も聞こえてきそうですが、当時小学校 3 年生だった当事者がやっと成人式を迎える時間が経過しただけです。彼等を待ちかまえているこれからの長い人生の道のりを考えると、就職や生活の自立、結婚や子育て、転職や退職、そして老後の生活など様々な出来事があります。多くの人たちが人生で出会う出来事を、彼等もまた充実した形で迎えていくには、これまで以上にたくさんの人たちに支えられ励まされながら過ごしていくこととなります。

高次脳機能障害の発症は比較的若年期であることも特徴であり、支援の道のりもまた永く途切れ目のないものである必要があります。千葉県でこうした息の永い支援を継続していけるには、地域でのサポート力の育ちも欠かせません。私たちは、当事者やご家族の声を聞きながら、地域の誰もが支え手になれるよう活動を展開していかねばならないと思っています。これからも、多くのみなさまとともに、だれもが自ら望む地域で暮らし続けていけるそんな街づくりの一翼を担っていきたいと思っています。



菜の花メッセージは、高次脳機能障害支援にかかわる方々から、応援メッセージを頂き掲載しております。

## 第 2 回支援コーディネーター全国会議

**開催** 2月20日(木) 東京都三田共用会議所

2月20日、東京にて支援コーディネーター会議が開催され、全国より155名の支援コーディネーター及び関係職種の参加がありました。

今回のテーマは『高次脳機能障害者の移動支援』で、午前には国立リハ飯島先生の「すべての人にモビリティを」というタイトルでの講演、実績報告として、山梨県、鹿児島県、国リハでの取り組みが発表されました。

午後は、中伊豆リハの「高次脳機能障害者に対する自動車運転評価と支援」、かがわ総合リハからの「高次脳機能障害者に対する公共交通機関での移動支援」の取り組みについての発表があり、その後グループ討議が行われました。国リハの飯島先生、熊倉先生の講演では、モビリティは自動車や公共交通機関によって確保されている場合が多く、障害者にとって自動車運転は自立した生活を確保するための鍵となる、また高次脳機能障害があっても、その程度によって運転内容に問題の無い人が存在することから、適正な評価が求められるとお話がありました。

自動車運転に代わる公共交通機関での移動支援も重要であり、個々の障害特性に適した代償手段の提供(選択)と獲得、環境調整の支援が重要であることを再確認することが出来る機会となりました。

支援センター 揚戸・地挽



## 第 2 回全国連絡協議会：第 2 回全体会議報告

**開催** 2月21日(金) 東京都三田共用会議所

平成26年度事業運営方針が厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部福生泰久課長補佐より報告されました。概要は以下のとおりです。

①平成25年度から高次脳機能障害及びその関連障害に対する支援普及事業へ名称変更となった。

②平成26年事業予算案(国リハ実施分11百万円、都道府県実施分462億円)③支援拠点機関総数が100カ所(平成26年2月現在)、相談支援コーディネーター数は295名(平成25年2月現在)となった。

続いて国リハ、各ブロックの平成25年度事業報告・平成26年度事業方針の報告が行われ、地域性に応じた特色ある取り組みが報告されました。

厚生労働科学研究事業・分担研究報告として高次脳機能障害支援センター長太田令子が『高次脳機能障害者の地域生活支援の推進に関する研究』の報告を行い、千葉リハセンターでの青少年期支援の取り組みの他、損保協会助成金事業を受けナビゲーション機能付き情報マップの作成について報告しました。

支援拠点機関が昨年度70カ所から100カ所に増加し、全国的な事業の体制整備が進んでいると感じました。今後も全国どこでも地域で身近に相談支援ができるような体制整備が進んでいくことを願います。

支援センター 阿部



(2/21 全国連絡協議会@東京都三田共用会議所)

千葉の動き



平成25年度  
高次脳機能障害支援ネットワーク連絡協議会

1月29日に本会議が開催され、私は千葉県理学療法士の会長の会長として今回初めて出席させていただきました。

各支援拠点機関の報告を受け、地域社会で暮らし続けるために社会全体の理解をどのように得ていくのかが、今後の大きな課題であろうと感じた次第です。

保健・医療・福祉の様々な場面で多職種協働が議論される昨今です。産業や教育に関わる分野も含め、個別支援に留まらず、社会全体の理解を勧めるために、他の職種・機関・組織とどのような協働が展開できるかを考えさせられた時間でした。また、地域包括ケア体制の構築に向け展開されている「高齢者を地域で支える」という議論を、高次脳機能障害者にどのように展開するかの議論の必要性を感じた時間でもありました。

一般社団法人千葉県理学療法士  
会長 田中康之

障害者雇用マニュアルコミック版 6



平成 26 年 3 月 発行

本マニュアルは、高次脳機能障害者の雇用促進、職場復帰及び安定した継続雇用を実現することを目的として、高次脳機能障害者の雇用管理等のノウハウをわかりやすいコミック形式で解説したものです。本マニュアルが、できるだけ多くの企業などで活用され、高次脳機能障害者の雇用促進、職場復帰、雇用継続につながるよう役立てていただければ幸いです。(本文より抜粋)

発行元：独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構

高次脳機能障害支援情報マップ作成事業

ついに、情報マップを披露する時が来ました！！協力して頂いた全国の支援拠点のコーディネーターが集まり、当事者、家族、支援者などにお役に立てるものを念頭に置いて作成しました。

情報マップは、千葉リハのホームページでご覧いただけます。

<http://www.chiba-reha.jp/koujinou-support/index.html>



講演会での様子



(1/25 東京あすか会議室：支援マップ委員メンバー)



(2/21 全国連絡協議会の会場で、支援マップの説明を聴講するコーディネーターの皆様)

ハイリハキッズ代表・中村千穂様からメッセージを頂きました。

web 検索が身近な私たちにとって、「待ってました！！」という情報ツールです。母親として客観的にこの障害について考えることもできました。是非、検索を！！

## 「高次脳機能障害の方への支援は、 全ての支援スキルにつながっている」



講師 福生泰久氏  
厚生労働省社会・援護局障害  
保健福祉部  
(1/18 千葉市文化センター)



講師 土江啓悦氏  
エスポール出雲クリニック統括  
島根県支援コーディネーター

## 第10回高次脳機能障害リハビリテーション講習会

高次脳機能障害の方への支援について、ネジを締めなおさなければいけない。

1月18日に開催された「第10回高次脳機能障害リハビリテーション講習会」に参加してそんなことを感じました。中核地域生活支援センター（以下、「中核センター」）が始まったのは今から10年前（平成16年）。介護保険の地域包括支援センター、障害者福祉の基幹相談センターや相談支援事業等が設置される前の時期でした。障害を持った方が通う場所も多くはありませんでした（制度の改変もあり事業所の数はこの10年で3倍以上に増えています）。中核センターには制度を使えない方、制度では足りない方が相談にお越しになっていました。高次脳機能障害の方からの相談もいただいていた。

平成16年頃は高次脳機能障害の方について制度の摘要が殆どありませんでした。

実態調査と枠組み作りを行い、普及可能な支援体制と手法の提示が目指されたモデル事業が行われていた時期です。制度的に使える道具はほとんどなかったので、相談に来られた方には、医療機関に同行したり、生活上の課題を一緒に考えたり、試行錯誤するしかありませんでした。千葉リハにも、何度も相談させていただいていました。

モデル事業の成果があって、平成18年頃から高次脳機能障害の方の多くが精神保健福祉手帳の対象になりました。この時期、障害者自立支援法の施行によって事業所数が増加していたこともあり、日中活動の場所、就労訓練等の具体的な支援につながることが容易になったのです。

そして、つながれる場所が出来たことで安心をしていた部分があったのではないのでしょうか。必要なことをしっかり行えているのでしょうか。勿論、他人ごとでなく我事として不十分さを痛感しました。

「障害の出現の仕方が個々によってバラバラ、そのため個々の理解とそれに応じた対応を工夫することが求められる」「高次脳機能障害の方への支援は、全ての支援スキルにつながっている」講師の方の言葉は印象的でした。

お一人の方をもっとよく知ること、必要な配慮を個別に行うことが必要です。そのために、これまでより心がけて、高次脳支援センターに相談させていただきたいと思います。よろしく願います。

（中核地域生活支援センター長生ひなた 渋沢茂）

渋沢様、ご寄稿ありがとうございました。

## 第12回高次脳機能障害交流会開催



3月8日（土）第12回高次脳機能障害交流会を当センターで行いました。全体会はテーマを「学ぶ・暮らす・働く」～あなたの身近にある相談場所～と題し、各専門分野でご活躍の3名の方（学ぶ：袖ヶ浦特別支援学校の塩田先生、働く：若葉泉の里の桐木氏、働く：千葉障害者職業センターの羽原氏）をお迎えしてのシンポジウムと、その後分科会は、学ぶ・暮らす・働く・当事者の各グループに分かれシンポジストとのディスカッション、当事者はボッチャ大会を行いました。

交流会全体の参加者は79名、分科会は働くグループに42名と約半数近くの方が参加され、「就労」の関心の高さが伺えました。また交流会アンケートでも、54名の方に回答がいただき、交流会に参加して参考になったとの意見が多く寄せられました。

### 今年も参加しました！ 『更生園ふれあいフェスタ』で育苗セットを販売



**すべて完売！**  
お買い上げいただいた皆様、ありがとうございました。  
上手に育ててお楽しみください。

利用者様から当日の感想を頂きました。  
掲載いたします。ありがとうございました。

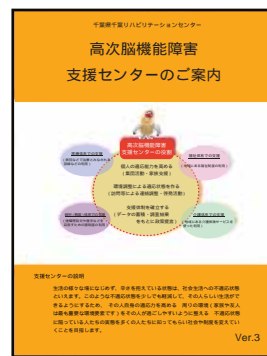
2月21日の「ふれあいフェスタ」で、リハビリのメンバーが作った育苗キット（チマサンチュ、ルッコラ等）を3人で販売しました。迷っているお客様には積極的に商品の説明などをした結果、30個すべてを完売しました！充実した楽しい一日でした。仕事に復帰する一歩として経験できてとても良かったと思いました。（N様）

2月21日ふれあいフェスタの育苗キットの販売に参加しました。去年の7月の交通事故による影響で休職も続き今回のように販売の役割を果たすのも初めてでした。当日お客さんも少なく全部売り切れないかと思い、育て方や育苗キットの使い方の説明をして完売を目指しました。最終的にキットが完売されて助かりました。販売の記録や会計もミスなく良かったと思います。（A様）

### スペース・ぴあ様、支援センター見学に

NPO法人スペースぴあは、主に統合失調症圏の方々の回復を目指して12年目を迎える、<家族の深い想い>から発した運動体です。街中への引き売りやメール便の配達、畑仕事、病院の売店や農家の直売所への納品、隣市への洗車等を行う為に、各自がその日の仕事を自ら選び、毎日地域社会に繰り出しては人と接し、工賃を得ています。ご縁により数年間で3人の高次脳機能障害の方々をお迎えしましたが、この度は幸いにも千葉リハ様の「働くためのグループ」を見学させて戴き、「流れている時間の緩やかさ」「スタッフの配慮の手厚さ・温かさ」「その日毎の到達点の明示」の面で私どもの空間との相違を知り、お陰様で自らを顧みる良い機会となりました。私どもが創り上げて来た空間（Space）は、時間の流れが速く、やや冷たく、日々己を研ぐという、自らの生を生き抜く際の心構えを彼方に掲げています。千葉リハ様から引き継ぐ際には、彼等に2つの空間の落差に関する説明や配慮が足りませんでした。私どもが流す「時間の速さ」や「温かさ」に関しましては、「這えば立て、立てば歩めの親心」となりがちなく家族>の陥りやすい<性急さ>に気づかされ、「その日毎の到達点」が明示されている個々のプログラムの緻密さには、唯々脱帽し、猛省を迫られました。学ばせて戴きまして、心から感謝しております。

### 支援センター 新パンフレット発行！！



高次脳機能障害支援センターパンフレット第3弾を作成。『あなたはいま、どのステージにいますか？』『あなたは支援を上手に使えていますか？』『支援センターはどんな仕事をしているの？』当事者、ご家族に分かりやすいように支援センターの仕事を説明してます。掲示板発送対象の方々には、新年度発行のこちらを掲示板と一緒に送付いたします。





## 千葉リハビリテーションセンターと高次脳機能障害の歴史①

13年前、千葉リハは厚生労働省の高次脳機能障害支援モデル事業に千葉県が参画を決めたところから始まります。その時の立ち上げのメンバーとして、太田令子コーディネーターは中心的な存在でした。支援センター便りでは、『千葉リハビリテーションセンターと高次脳機能障害の歴史』と名して、数回の掲載で現在までを追って紹介します。

### 高次脳機能障害支援モデル事業

- 平成 13 年 千葉県で千葉リハが県の地方拠点病院として指定される。
- 平成 14 年 モデル事業 2 年目は、利用者実態調査と全県調査を開始。
- 平成 15 年 モデル事業最終年は、財団から助成金を受け調査を続行。

### 千葉県モデル事業に参画

厚生労働省の高次脳機能障害支援モデル事業に千葉県が参画を決めたのは、他の都道府県が名乗りを挙げてからかなり遅れてのことです。千葉リハビリテーションセンターが県の地方拠点病院として指定され、県担当者と千葉リハ総務課長、そして当時訓練治療部長だった太田の 3 人で、厚労省に出かけていったのは平成 13 年の 4 月に入ることでした。

### ワーキングメンバーを決定

平成 13 年 4 月、着任されたばかりの北原センター長から訓練治療部長に呼び出しがありました。内容は訓練治療部で高次脳機能障害者への訓練実績があるか否かということでした。当時はデータが不完全で、成人医療棟利用者に関しては、誰が高次脳機能障害に該当するかを検索するには時間がかかりましたが、返答はすぐにしなければなりません。小児患者については中途障害者の人数は成人患者に比べてはるかに少なく、高次脳機能障害者か否かを判断するには容易であったため、成人患者の高次脳機能障害者実数は掴めないが実績はあること、および小児に関しては評価データを揃えて実績を報告しました。このことが、千葉県ではモデル事業で小児患者も登録することになったきっかけでした。センター長からは、全職員対象の報告会で高次脳機能障害支援モデル事業に取り組むことが伝えられました。

一方モデル事業に千葉リハが取り組むに当たって、各部署からワーキングメンバーが決まりました。このワーキングにセンター長から実態が分からないことは致命的であり、直近 5 年間の当センター患者の実態調査をすることが指示されました。

### 実態調査からわかったこと

3 B および 3 C 棟入院歴のある患者数は直近 5 年間で 1283 人でした。このうち 622 人が脳血管疾患、頭部外傷が 50 人であることが分かりました。翌平成 14 年に 99 名の方々のその後の実態調査をし、76 名から回答をいただきました。

また、調査回答者のうち 37 名について訪問調査を行いました。こうした一連の調査を通して、医療終了後の高次脳機能障害者の生活実態が少し分かってきました。心配していた人が無事に復職し、その後順調に仕事を続けられている様子をお聞きして嬉しくなりました。反対に、職場で守られていたはずの人が、障害が解ってもらえていないために、一人苦しみ退職に追い込まれてしまったことを、全く知らずにいた自分達のふがいなさに落ち込むこともありました。しかし、この取り組みを通して、千葉リハ利用者の‘その後’を把握することの大切さに気づき、定期的に交流の場を持つことを始めるきっかけになりました。千葉リハビリテーションセンターの職員一人一人が高次脳機能障害支援に向かい合ったスタートの出来事です。

この調査を進める中で分かったことは、千葉リハでは  
①高次脳機能障害の考え方  
②その人がどういう高次脳機能障害を有しているかの評価の仕方  
③退院後のフォローの仕方のすべてにおいてバラバラで組織的に何一つ動いていない、ということでした。

### 日本全国の動きを視野に

実態調査活動で露呈したバラバラさは、国リハおよびモデル事業に参画している 10 箇所の地方拠点病院（平成 14 年度からは 11 箇所）の担当者が診断基準・評価 / 訓練・社会生活の各作業班に分かれて高次脳機能障害者の登録作業と検討を繰り返す活動に参加しながら、修正を加えていくことが出来ました。先進的な取り組みをしてこられた県や政令指定都市の拠点機関の担当者からは、懇切丁寧な助言をいただきました。

この会議への参加を通して、千葉リハビリテーションセンターの中だけを見てものごとを考えるのではなく、日本全国の動きを視野に入れて自分達の役割と進むべき方向を考える必要があることに気づかされました。

## 視野を広げる

こうした先達のアドバイスを受けながら、千葉県全体の高次脳機能障害支援に責任を持つことを自覚しつつ、様々な形で全県調査を行いました。平成 14 年は直近 5 年間の利用者実態調査と、県内医療機関対象に調査した県内高次脳機能障害の推計有病率（医療機関に於ける有病率は 75.5 人 / 10 万人と推計された）を出した調査、県内学校・社会福祉施設等での高次脳機能障害者利用実態調査、成人高次脳機能障害評価バッテリーの健常小児適応時の参考値調査等、一挙に様々な調査を行いました。こうした調査活動で見てきたことは、地域でサポートしているはずの人たちに、高次脳機能障害事態があまり知られていないという事実でした。しかし、こうした視点の拡がりを持って県内の地域生活を支援している人たちと出会うことで、それぞれの機関で支援に苦慮している人たちへの協働支援の場が作られ始めました。「千葉リハの顔が見えるようになった！」と言われるようになり、「高次脳といえば千葉リハ」と多くの支援機関の方々に思い浮かべていただけるようになる、スタートの年が平成 14 年だったと思います

## 地域支援機関から教えられたこと

モデル事業 3 年目になると、いよいよ最終の年かと、一瞬緊張しました。これまではモデル事業として補助金を受けていましたが、場合によってはこの補助金が打ち切られることもあります。そんな時「お金がないので支援事業はできない」といって、この事業を放り出すことは出来ません。そこでどうするか考えました。手っ取り早い方法は、外部資金を獲得することを考えるというものです。モデル事業費ほどの大金は出なくても、せつかく動き始めた活動や連携体制を潰すわけにはいきません。平成 15 年は日本財団から、翌 16 年には三菱財団から研究助成金を得て、県内調査を続けました。この調査を通じて、調査対象圏域を香取・海匠圏域に絞りました。ここでは、障害者支援の拠点として長らく活動を展開してこられたロザリオ会に調査協力をお願いしました。この調査では香取海匠地域にあるすべての介護・障害関係の施設・機関に訪問調査をして、その実態を垣間見ることができるといった大きな収穫がありました。この調査を通して、当時ロザリオ会の専務理事だった細渕様から「まさか、調査が終了したら千葉リハは、どうもありがとうございます、といて引き上げていくわけではないでしょうね」とギョロリとした目で迫られ、一同縮上がったことが昨日のこのことようです。

細渕さんに言われただけでなく、一つ一つの支援施設や機関を訪問させていただくと、それぞれに利用者さんに取り組む温度が、恐ろしいほど明確に伝わってくるという体験をしました。そんな中で、熱意はありながらも高次脳機能障害の実態がわからず支援に苦慮している施設・機関の人たちと協働で、どうしたらよりよい形で高次脳機能障害者が地域で生活していけるかを考えるために、研究会を発足させました。

こうした一連の活動は、千葉リハという箱を飛び出し地域支援機関と協働で仕事をするすることで地域の支援者との連携とは何であるか私たちに教えてくれました。

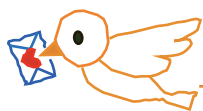
## 編集部より

今号では、モデル事業が始まった平成 13 年から三年間の様子を掲載しました。

掲示板の前身となる「モデル事業だより」の第一回発行は、平成 13 年 7 月 24 日でした。

モデル事業に参加するにあたり、連絡協議会委員として、太田ローデイナーが推薦されたと報告されています。

次号では、平成 16 年から数年間の歴史を掲載する予定です。千葉リハが、いや千葉県が高次脳機能障害に取り組んだ流れを文面で目にする、当時の時代が手に取るようにわかります。調査の資金、地域の温度、千葉リハとしてではなく、千葉県代表としてやらねばならないこと。一人一人がこれから「必要だからやる」と気持ち変化していくのも、高次脳機能障害の歴史の中で体験できるのではないかと思います。



# information



6



【こーちゃん】  
こんにちは、僕こーちゃん!  
高次脳機能障害を持っています。  
生活に役立つ豆知識を漫画形式で  
紹介していくよ!  
(だから僕の頭は豆なんだ~)

【しえんちゃん】  
こんにちは、しえんちゃんです!  
高次脳機能障害を持つ人が  
自分らしく暮らせるように  
色々な情報をお伝えして  
いききたいと思います☆彡



太田支援センター長、お疲れ様でした。

## 編集後記

大雪に見舞われてアタフタしていたのがついこの間のことだと思  
っていましたが、今は桜が満開に近い状態で花開いています。  
「こ～じのう掲示板」も3年間Yさんの奮闘で充実した紙面を作り  
続けることが出来たと思います。高次脳機能障害支援の事業を始め  
たばかりの頃は、誰も高次脳機能障害者をターゲットにした支援の事  
業とは何かをイメージできませんでしたので、我々スタッフが何を  
しているかをお伝えすることが中心でした。それが、事業を展開して  
いく中で、我々スタッフが企画したり実施している活動を、支援を必  
要としている人たちは別の場所で支援に携わっておられる人た  
ちは、どんなふうに見ておいでなのかを語っていただくようになりま  
した。特にこの「こ～じのう掲示板」になってからは、その傾向を一層  
推し進めてきました。袖をふれあったというだけで、多くのみなさま  
に記事をお願いしたり写真等のご協力をいただきましたこと感謝申  
し上げます。さて、私Oは今号をもって編集長の役から退きます。次は  
新編集長としてOさん(やたらOだらけで紛らわしい!)が引き継い  
でくれるでしょう。(O)

モデル事業だよりの編集担当になり、名称は掲示板に変わって9年。  
同じ部署で中庭の季節を楽しみ、美味しい食べ物の話をした太田  
令子支援センター長が3/31でご退職になり、私としては寂しい限  
りです。支援センターが始動後、ずーっと走りっぱなしだった体  
を皆で気遣い(だからと言って、替りに仕事をした訳ではありませんが)多忙な日々を送る体を心配した日もありました。元気で  
笑いながらのご退職の日、強風の中で最後の写真を撮りました。  
今後、千葉を飛び出して専門分野を追求すると先日の囲む会でご  
発表がありました。「仕事以外でも、新しいことにチャレンジして  
ください」と私たちに向けられた言葉は、すべての方々にも通じ  
るのではないのでしょうか。来年度からの新体制の掲示板。どうぞ  
よろしくお願いします。(Y)



センター中庭桜 14/3/31